

編集後記

*『人文論集』第六一号をお届けします。今年度も刊行に至るまでに多くの方からご助力を賜りました。ご支援いただいた皆様には、御礼申し上げます。

*今号も多数の論考を掲載することができました。編集委員を務めていると、著者から送られてきた原稿を読者より早く目にする機会に恵まれるわけですが、各論考を読んでいて、ふと考えることがありました。それは、文章との接し方についてです。

*批評家の小林秀雄は一九三四年に発表されたエッセイのなかで文章を鑑賞することの大切さを説いています（小林秀雄『文章鑑賞の精神と方法』『小林秀雄全作品5』新潮社）。小林によれば、文章を鑑賞するとは、「味う」とであり、「文章の与える印象を十分に享受するという事」です。そこには二つの誘惑があります。一つは批評の誘惑です。「ただ鑑賞しているという事が何となく頼りなく不安になって来

て、何か確とした意見が欲しくなる（……）。しかしだからといって、自分の意見を定めて文章を読んでいると、「広くものを味う心が衰弱して」、「ただ自分の狭い心の姿を豊富な対象のなかに探し廻っているだけ」になってしまえます。一方、一定の意見を持たずどんなものでも味わおうと心掛けていると、今度は好事家となる誘惑が待っています。すなわち「ものを深く味わず、表面だけを楽しむという傾向」に陥ってしまうのです。

*文章鑑賞の際、こうした誘惑に引き込まれてしまうのはなぜでしょうか。それは「鑑賞というものに常に自分の心を賭ける事を忘れるから」だと小林は言います。「鑑賞するのに虚心という事が必要だ、自分を捨てて他人のなかに這入込めなくてはならぬ、という事を言いますが、それはつまり自分の心を賭けるといふ意味なのです。（……）君自身の本体を賭けるといふ意味なのです」。

*本誌を手にとった学生の皆さんには、

ぜひ所収の論考を鑑賞し、味わっていただければと思います。

（高岡記）

（二〇二二年度編集委員 石田智恵、大森信徳、高岡佑介、武黒麻紀子、ヴァンサン・マニゴ）

二〇二三年二月一〇日 印刷
二〇二三年二月二〇日 発行

非売品

編集者 高岡佑介

印刷所 (株) 敬文堂

発行所 早稲田大学法学会

東京都新宿区西早稲田一―六―一
〒169-8050 電話 三三―三三―四一四一
振替口座 東京 九七〇九二―一番

<http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/handle/2065/5246>